

まちなかにおける空き地活用手法としてのコミュニティガーデンの有用性とその実装に必要なノウハウ・ライフスタイル

避難指示解除を経た福島県南相馬市小高区の実態：その2

学生会員 ○應武遥香*
学生会員 森崎慎也, 由利泰蔵
奥澤理恵子*
正会員 窪田亜矢**, 李美沙***, 鈴木亮平****
萩原拓也*****, 益邑明伸*****

原発事故被災地域 避難指示解除 コミュニティガーデン
福島県南相馬市小高区 空き地 まちなか

1. はじめに

前稿に続き、福島県南相馬市小高区での小高復興デザインセンター（以下、センター）の取り組みに関する報告として、本稿ではまちなか菜園事業の取り組みを通じた空地活用の実践とそのサポートとして行った菜園講習会について報告する。センターは2016年より南相馬市・東京大学が運営した協働の拠点であり、その取り組みについては昨年までの報告の通りである。2019年度からは東京大学が復興庁「心の復興事業」の助成を受けて運営している。

2. まちなか菜園事業の概要

センターでは2017年度、北原ら(2018)で報告した通り、空き地の活用と菜園づくりに取り組んだ。

これらのモデル地区での取り組みを踏まえ、2018年度からは奥澤ら(2019)で報告した通り、住民有志団体であるはなみちプロジェクトチーム（以下はなみち）とセンターの協働により、まちなか菜園事業を開始した。この事業は、建物解体後の空き地等で暫定的に菜園づくりができるよう、撤去可能な大型プランター、ガーデン家具等を無料で貸し出す取り組みで、複数人での利用を条件として行っている。まちなかでは2020年3月現在6カ所で利用され、菜園づくりを通じたコミュニティ活動の促進や維持を目的に、集落部でも4カ所で利用されている。

3. 菜園講習会の背景と目的(2018年度の反省から)

菜園講習会を企画した背景に、まちなか菜園を活かしていなかったことがある。まちなか菜園事業の目的はコミュニティ形成の促進や可視化、住民共同での空き地管理意識の向上などである。しかし、2018年度までは菜園参加者同士が交流する機会に乏しい上に、大型プランターの上手な使い方や、コンパニオンプランツなどのノウハウが無いため、菜園づくりの楽しみを十分に引き出せていなかった。

地元住民も「菜園」という「農業」とは異なるものに

馴染みが無かった。我々は砂利地での菜園づくりという観点から大型プランターを使用したのが、住民の間ではその使用に戸惑いが見られた。地植えの農業に関するノウハウはあるが、空き地でのプランターを使った菜園づくりのノウハウは無かったのだ。

また、まちなか菜園事業は一定程度継続的に菜園づくりに取り組んでいただくものであり、始めるハードルが高い。一度、菜園づくりを手軽に体験していただき、まちなか菜園事業への理解を深めていただく必要もあった。

そこで、①まちなか菜園参加者への寄せ植え講習を受ける機会の提供、②まちなか菜園参加者同士のネットワークづくり、③まちなか菜園事業の宣伝の機会創出、④菜園の担い手の育成を目的として、菜園づくりのノウハウを専門家から学ぶ菜園講習会を開始した。

4. 菜園講習会の活動内容など

はなみちとセンターが協働で企画し、NHK「ぐるっと関西おひるまえ」等で講師を務める家庭菜園の専門家を招いた。初回講演を2018年12月に行った後、2019年3月末から実際に野菜の栽培を開始、計6回の講習会を2019年11月までに行った。毎回6名程度の住民の方に継続的にご参加いただいた。



図2 はた氏による解説



図2 食事会の様子



図 3 菜園 tips



図 3 菜園講習会のチラシ

活動内容は野菜の植付けや手入れの方法を、講師の実演・指導を交えながら学ぶものだ(図1)。植える野菜の選定も講師に季節や手入れの容易さなどの観点からご指導いただいた。収穫の際には、その場で参加者と共に収穫した野菜を調理し食事を開催した(図2)。新鮮で美味しい野菜を食べられるという菜園の楽しみや、コミュニケーションの場という空き地活用の可能性を体験してもらった。

講習会を通じて学んだ野菜づくりのコツは「菜園 tips」としてまとめた(図3)。これは参加者に配布する他、センターのWEBサイトに公開し、「まちなか菜園のススメ」という冊子にまとめ、センターなど小高各所で配布している。

5. コミュニティガーデンの空き地活用手法への有用性

(ア) 菜園講習会から得られた知見

本事業は空き地活用のツールとしての菜園の実現性を模索していると言える。縮退の時代を前に、市街地で増えるであろう空き地の管理が課題とされているが、その手段の一つに家庭菜園が挙げられる。

実際に菜園を空き地活用のツールとして実用化するためには、ガーデニングの専門家と連携し、市街地の空き地活用に相応しい菜園のあり方や、菜園・空き地を活用したライフスタイルを構築する必要がある。2019年度の菜園講習会を通じて、①日常生活の負担にならない簡易な手入れだけで育ち、②害虫に強く、③景観にも配慮する、空き地活用という目的に沿った菜園づくりのノウハウや、①その日に食べる量を必要に応じて収穫し、②その際周辺住民と交流するというライフスタイルを模索できた。売るための野菜を作る従来の「農業」とは異なる、空き地活用としての「まちなか菜園」ならでの知見を今後も蓄積することは、原発被災地域のみならず、縮退

の時代の市街地における空き地活用手法を見出すために必要だと考えられる。

(イ) まちなか菜園の展開を通じた風景の変化可能性

2017年度から菜園づくりに取り組む中で、空き地に建物を新たに建てるだけでなく、空き地を空き地のまま活用する動きが出ている。まちなか菜園事業では奥澤ら(2019)のように、はなみちと移住者・住民が協働して空き地活用に取り組んでいるほか、2019年度にははなみちを介さず、移住者と住民が主体となって活用する動きもあった。他にも、空き地をハーブ園や馬場として活用したいという声がセンターに寄せられている。これらの動きは「自宅近辺の空き地を自分の生活に活かそう」という意識がまちなか菜園に関わっている住民を中心に芽生えてきたからだと言える。現在、継続的に菜園講習会などでアプローチ出来ている住民は6名程度に留まっているが、少人数ながらも空き地活用を模索し、その知見を広める動きは起り始めている。「空き地は誰かの所有物ではなく、地域みんなで関与して活かしていくもの」と捉える、空き地への意識改革につなげることが重要である。

6. 今後の課題

少しずつ広がりを見せているとはいえ、やはりまち全体で空き地活用の取り組みを行う必要がある。そのためには地域のライフスタイルに合った空き地活用手法を模索する必要がある。まちなか菜園は空き地活用の一手法であり、雑草の繁茂を抑える地被植物を植えるなど、「活用」するわけではないが「管理」を容易にする手法も求められている。また、空き地の所有者側の意識を変える必要もある。土地を「誰かに貸して収入を得るもの」ではなく、「地域の人に活用・管理してもらうもの」と捉えるのだ。空き地活用の知見やライフスタイルを構築し、住民や土地所有者の空き地に対する意識を変え、まちなか菜園を真のコミュニティガーデンに育てる必要がある。

【補注】

ⁱ <http://td.t.u-tokyo.ac.jp/odaka/>

【参考文献】

- 1) 北原麻理奈・窪田亜矢・李美沙・萩原拓也・益昌明伸・新妻直人・水上俊太・井本佐保里・鈴木亮平. まちなかにおける空き地の菜園化に関する実践と考察 避難指示解除を迎えた原発被災地域・南相馬市小高区の実態把握と復興に向けた取り組み～その2. 日本建築学会大会学術講演梗概集. 都市計画. pp.891-892, 2018
- 2) 奥澤理恵子・窪田亜矢・萩原拓也・李美沙・北原麻理奈・新妻直人・鈴木亮平. まちなか菜園事業の取り組みと空地利活用への発展 原発被災地域における小高復興デザインセンターの取り組み～その2. 日本建築学会大会学術講演梗概集. 都市計画. pp.855-856, 2019

*東京大学大学院院生

東京大学大学院工学系研究科・特任教授(都市工学専攻)、*復建調査設計(株)

****NPO法人 urban design partners balloon 代表

*****東京大学大学院工学系研究科・特任助教(社会基盤学専攻)、*****東京大学特任研究員

* Project Prof., University of Tokyo, Faculty of Eng., Dept. of Urban Engineering, Dr. Eng. ** University of Tokyo, *** FUKKEN CO., LTD. **** president of NPO-balloon, *****Assistant Prof, Dept. of Civil Engineering, University of Tokyo, *****Researcher, University of Tokyo